

横須賀市吉井城山貝塚から発掘されたカワウソ遺骸

長谷川 善和*

(with 1 Plate and 1 Textfigure)

Two Fumerus Remains of Common Otter from the Shiroyama Shell Mound of the Early Jōmon Age in Yokosuka City, Japan

Yoshikazu HASEGAWA*

まえがき

昭和35年から36年にかけて、城山第1貝塚の発掘が行われ、土器類と共に獣類・魚類・鳥類など、相当の量の脊椎動物遺骸が産出した(赤星, 1962)。筆者はそれらの標本を見る機会があり、中でもカワウソの遺骸に特に興味を持った。当貝塚産出の獣骨類遺物について詳細に記載し、その意義を明らかにすることも必要であると思われるが、ここではカワウソに限り、簡単な記載と存在意義について述べる。

1. カワウソ科およびカワウソ属の分布

世界におけるカワウソ科には18属を数え、うち11属は絶滅種である(SIMPSON, 1944)。時代的には、ヨーロッパの後期漸新世のものが最も古く、北米の中新世中期、アジアの鮮新世初期、アフリカの鮮新世中期、ついで南米の洪積世の順に出現している。そして現在は世界的に分布している。カワウソ属そのものは、ヨーロッパアジアでは鮮新世初期、北米では鮮新世後期、南米では洪積世、アフリカでは現世以降、現在に至っている。

日本では、化石として、1) 北九州市門司区松ヶ枝の洪積世中期の *Lutra* sp. (左上顎歯)(直良, 1954) が最も古い、現物は戦災で焼失して記録しか残っていないという。2) 次いで、宮城県登米郡南方村青島の新石器時代貝塚から *Lutra lutra leptonyx* (頭骨)(MATSUMOTO, 1930) が、3) 宮城県桃生郡桃生町川下の新石器時代貝塚から *Lutra lutra lutra* (頭骨、顎骨)(MATSUMOTO, 1930) が、4) 北九州市小倉区平尾台にある牡鹿洞(石灰洞)から洪積世後期の *Lutra* sp. (右下顎骨)(長谷川, 1964) などが知られている。

現生としては、*Lutra lutra lutra* の名で日本全域に産するといわれたり(黒田, 1940)、または *Lutra lutra whiteleyi* と呼ばれて、1930年以降香川県を除き絶滅に近いものであるといわれる(今泉, 1949)。しかし、現在のところ確認されるのは愛媛県南部海岸地帯のみである(清水, 1959)。ところで歳時記によれば、陰暦の正月16日より5日間は雨水の気の第一候となり、「獺魚を祭る」である。俳人正岡子規は「獺祭書屋主人」と号し、氏の忌日(月19日)は獺祭忌といわれる。また、有名な河童というのは、本体は獺であるとの考証がある。これらの事柄を考えると、カワウソは古くから人々との接触が相当に多かったものといえよう。農林省の「狩猟免許者による狩猟統計」によれば、大正12年から昭和2年までの5年間に、北海道から鹿児島にかけて325頭のカワウソが、神奈川県から昭和1~2年に7頭が記録されている(品田, 1938)。そして、昭和3年以降

* 国立科学博物館古生物学課

Department of Paleontology, National Science Museum, Tokyo.

はカワウソが禁猟獣に指定されたために狩猟記録が確認出来ないが、かつて日本全域にわたりカワウソが分布していたことがわかる。カワウソの標本は、明治13年に国立科学博物館へ前田献吉氏が寄贈された全身骨格一体 (NSMM. 872, 産地不明) と、最近四国で採集された死体からの骨格標本が愛媛県立博物館などに保管されているにすぎない。

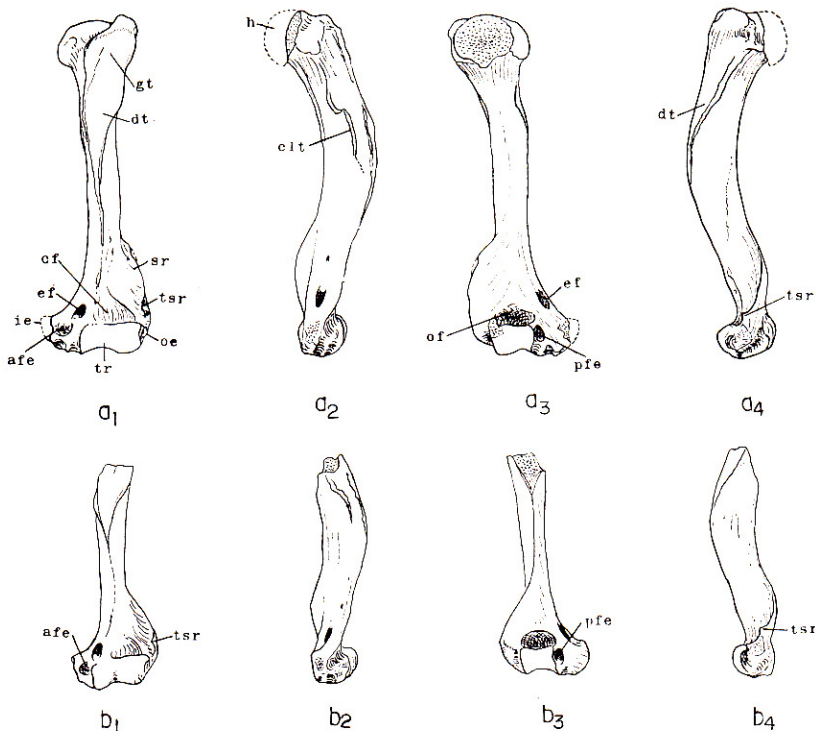
すなわち、城山貝塚産出のカワウソ遺骸は化石としても、現存物としても数少ない貴重なものであることがわかる。また貝塚から比較的多く産出していることは、カワウソの生態や人間社会との結びつきを考える上に見のがせない事である。さらに、カワウソの特徴を示す上膊骨遺骸が幼・成2体分産出したことは将来比較研究をすすめる上に重要である。以上のごとく城山貝塚産カワウソの資料的意義を強調しておく。

2. 記 載

産地 ; 神奈川県横須賀市吉井町台崎。

層準 ; 城山貝塚下部貝層, 初期縄文時代。

資料 ; 横須賀市立博物館所蔵, 左上膊骨幼体・成体各1個。



Text-fig. 1. *Lutra* sp.

a. Specimen, YCMP 60, left humerus, 1~4; anterior, medial, posterior and lateral side.

b. Specimen, YCMP 61, left humerus, 1~4; anterior, medial, posterior and lateral side.

Abbreviations: afe; anterior fossa of inner epicondylar 内上顆前側窩, cf; coronoid fossa 烏喙窩, cilt; crest of lesser tuberosity 小結節稜, dt; deltoid tuberosity 三角筋粗面, ef; epicondylar foramen 上顆孔, gt; greater tuberosity 大結節, h; head of humerus 上膊骨頭, ic; inner epicondyle 内上顆, oc; outer epicondyle 外上顆, of; olecranon fossa 尺骨頭窩, sr; supinator ridge 回外筋, tr; trochlea (上膊骨)滑車, tsr; tubercle of supinator ridge 回外筋瘤. $\times \frac{1}{2}$ natural size. Drawing by author.

A 標本 (YCMP, 60); 上膊骨頭の過半部や内・外上髁先端等を欠如する他は、ほぼ完全に近い左上膊骨。全体にかなり扁平で、遠心側では左右に、中央部では前後に扁平となる。骨体中央部は前方に特徴的な弯曲をなす。三角筋粗面がいちじるしく発達し、その先端は鳥喙窩上方に近い。外上顆上部回外節は外方および上方に広く翼状に拡がり、外側の一部は前方にまくれ込み浅い溝を作る。さらに、回外節の下部4分の1ほどの部分は特に山状の瘤をなし、回外節は上下に2分される。これを仮に外上顆結節瘤と名付けておく。小結節稜S字状の襞をなし、結節間溝は明瞭である。かなり大きい上顆孔を1個持つ。内上顆は内側下方に向けて相当に発達し、上膊骨滑車との間に特徴的な凹みを作り、その凹みは前後に1個ずつある。前部は滑車面より遠位に在り、広く大きい。後部のは滑車面の近位に在り、小さく深い。これらの凹みを仮に、内上顆窩と呼び、それぞれ内上顆前側窩・内上顆後側窩と呼ぶことにする。尺骨頭窩は鳥喙窩より深く明瞭な領域を示すが、鳥喙窩は浅く必ずしも明瞭でない。神経溝いづれも浅く、明瞭でない。

B 標本 (YCMP, 61); 骨体上端3分の1ほど欠如する左上膊骨。A 標本より小さく、全般の発達が悪く、華奢である。しかし、それぞれ各特徴は変らない。内上顆前側窩と後側窩は深さや大きさ等ほぼ同じであるか、むしろ後側窩の方が大きい。骨体の弯曲も弱く明らかに幼体である。

計測値 (mm)

	A標本	B標本	カリフォルニアカワウソ
上膊骨全長	99.7	+61.7	79.4~72.1
上膊骨頭幅	22.7	—	20.9~18.3
上膊骨頭厚さ	+16.7	—	22.3~19.4
骨体中央部幅	8.5	7.0	6.4~7.3
骨体中央部厚さ	14.4	12.8	12.5~13.9
遠位端幅	29.2	25.6	23.4~27.0
遠位端厚さ	13.0	10.6	10.6~12.3

3. 考察

Lutra に比較的形態が似ているのは *Meles* であるが、*Lutra* は *Meles* より骨体の弯曲度がはるかに大きく、扁平度も大きい。同時に細部において異なる。例えば、*Meles* では外上顆結節の側方への広がり小さく肉厚であること、尺骨頭窩・鳥喙窩の凹みはより深いこと、外上顆結節瘤内上顆窩が発達しないことなど *Lutra* と異なる。FIHER (1942) の記載した *Lutra canadensis brevipilosus* の骨格は説明が不十分である。しかし、図から判断すると、外上顆回外節は上下に2分するが、下半部が全体に厚く盛上がり凹まず、城山標本と異なる。内上顆前側窩は認められないが、後側窩が存在するのであるいは見落しではないかの検討の余地がある。全体に城山標本、または日本産 *Lutra* は *Lutra canadensis brevipilosus* より大きい。しかし、種として区別するには部分標本のみで危険である。ここでは *Lutra* sp. としておく。

4. 要約

1) かつて日本に相当数のカワウソが棲息したが、実際には資料(標本)がほとんど残存していない。2) したがって、城山貝塚産の大小(牡幼)2個体の上膊骨をくわしく記述することは重要である。3) その顕著なる特徴として、極度な変曲と扁平性および、外上顆回外節瘤と内上顆窩(前側窩および後側窩)の存在を指摘した。4) 種名は当分の間 *Lutra* sp. としておく。

おわりに、この研究をすすめるにあたり、横須賀市立博物館の羽根田弥太博士・柴田敏隆氏および関係者の方々から御援助いただいた、記してお礼申し上げる。

文 献

- 赤星直忠 1962, 横須賀市吉井城山第一貝塚調査概報 (一), 横須賀市博物館研究報告 (人文), 第6号. p. 1~21.
 ELLERMAN, J. R. and MORRISON-SCOTT, T. C. S. 1958~1946, Checklist of palaearctic and Indian mammals. p. 275~278.
 FISHER, E. M. 1942, The Osteology and myology of the California River Otter. Stanford Univ. vi+1~66.
 長谷川善和 1964, 九州平尾台の牡鹿洞よりかわうそが発見される. 哺乳動, Vol. 2, No. 3, p. 82~84.
 今泉古典 1949, 日本哺乳動物図説. p. 175~176.
 黒田長礼 1940, 原色日本哺乳類図説. p. 31.
 松本彦七郎 1929, 陸前国桃生郡小野村川下り響介塚調査報告. 東北大・理, 地質学古生物学教室邦文報告 No. 7, 1~65.
 MATSUMOTO, H. 1930, Report of the mammalian remains obtained from the sites at Aoshima and Hibiku, Province of Rikuzen. Sci. Rep. Tōhoku Imp. Univ. 2nd. Ser. (Geol.), Vol. XIII, No. 3. p. 59~93, pls. I-IX
 直良信夫 1954, 日本旧石器時代の研究, p. 20.
 清水栄盛 1959, ニッポンカワウソの頭骨について, 哺乳動, Vol. 1, No. 6, pp. 137~8.
 SIMPSON, G. G. 1945, The principles of classification and a classifications of mammals. Amer. Mus. Nat. Hist. pp. 114~115.
 品田 穰 1963, ニホンカワウソ特別調査報告 (概要), 文化財情報第52号 p. 15~19, および手記.
 鈴木棠三 1964, 獺体を祭る. 図説俳句大歳時記「春」, p. 13.

Résumé

This paper is the first description of the humerus remains of common otter in Japan. Japanese fossil records of common otter are the following four: A left upper jaw from the limestone cave deposits of Pleistocene at Matsugae, Moji district, Kitakyushu City, reported by Naora (1954); a skull from the shell mound at Aoshima, Minakata village, Tome district, and a skull and lower jaw from Hibiku, Kawakudari, Mono-cho, Mono district, Miyagi Prefecture, both being of the Jomon age, reported by Matsumoto (1930); and a right lower jaw from the limestone cave deposits of Pleistocene at Ojika-do cave, Hiraodai, Kokura district, Kitakyushu City, reported by Hasegawa (1964).

Common otter was widely distributed in the Japanese Islands up to about 1927, but it is now facing extinction. Skeletons and skin preserved at museums are also very few.

Description:

Order Carnivora
 Family Mustelidae

Lutra sp.

Text-fig. 1, pl. I

Locality: Shiroyama shell mound, Yoshii, Yokosuka City.

Horizon: Lower part of the shell mound (kitchen midden) of early Jomon (Neolithic) age.

Materials: An adult left humerus (YCMP 60) and a juvenile left humerus (YCMP 61), both being unusually falt. The supinator ridge is divided into two parts which are concave due to the presence of tubercle. Between the trochlea and the inner epicondyle, there are two fossae (one is anterior and the other is posterior), which are smaller and shallower than coronoid and olecranon fossae.

Dimensions (mm)

	Specimen a	Specimen b
Length of humerus	72.7	+61.7
Width of head	+22.7	—
Thickness of head	+16.7	—
Width of middle part of bone	8.5	7.0
Thickness of middle part of bone	14.4	12.8
Width of distal end	29.2	25.6
Thickness of distal end	13.0	10.6



Fig. a₁. Anterior view of the humerus of *Lutra* sp. (YCMP 60).
 Fig. a₂. Ditto, inner view.
 Fig. a₃. Ditto, posterior view.
 Fig. a₄. Ditto, outer view.
 Fig. b₁. Anterior view of the humerus of *Lutra* sp. (YCMP 61)
 Fig. b₂. Ditto, inner view.
 Fig. b₃. Ditto, posterior view.
 Fig. b₄. Ditto, outer view.